

世界には面白そうな作家がこんなにいたのか。この本を読み終えた君はつぶやく。そして駆り立てられるように書店におもむき、気になった本を片っ端から手に取るだろう。

地球上の様々な言語圏で、たった今も優れた作家たちが、あまりにも魅力的な言葉を次々と紡ぎ続けている。その言葉は魂を揺り動かし、我々を思索に誘う。これほどまで多くのものを与えてくれるというのに、どうして僕らは知らなかったのか？ 例を挙げよう。毎年秋になるとノーベル文学賞受賞者が発表される。今年こそは村上春樹が獲るのではないか。日本メディアは期待を煽るが、気づけば聞いたこともない書き手の名前が読み上げられる。ヘルタ・ミュラーって誰だ？ トーマス・トランストロムって翻訳あるの？

なぜこんなことになっているのか。実は、本書を読めばわかるとおり、ノーベル賞を獲得ほどの作家には多くの場合すでに日本語訳が存在する。つまり熱心な翻訳者や研究者がいて、書物や論文の形で読者を誘惑しようと何年にもわたって努力し続けているということだ。それでも僕たちは本を手にとれない。どうして？

この人の本ってこんなに面白いよ。二〇〇〇円なり三〇〇〇円なり投資しても、絶対に後

悔しくないよ。そうした身近なアナウンスが全くないからだ。たとえば、信頼する読書好きの友達に、お茶しながら、「これ絶対読んどいたほうがいいよ。読まないで死んだら後悔するって」と言われれば、ほぼ一〇〇パーセント僕たちは書店や図書館でその本を手にとるだろう。

でも誰だかわからない偉い学者さんが、上から目線で「この本の現代における文学的な意義ははかりしれない」なんて言っても、はいそうですか、で終わりだ。だって僕らは日々、生きることで忙しくてしょうがないもんね。「文学的意義」って何だそれ？ 面白いかどうか、明日も生きていくための力を与えてくれるかどうかもわからない本に、時給換算で何時間分にもなるお金を投資するなんて、とてもリスクが大きすぎるよ。

でもさ、実はその感覚こそが文学なんだ。世界中にいるどの作家だって、実際の社会の中で、日々金を稼いでなんとか暮らしている。ということは、僕らが直面しているのと同じ、あるいはそれ以上に激しい理不尽さ、筋の通らなさに直面して、苦闘し、物語の形で思考を紡ぎ、僕たちとシェアしようとしている。文学は、芸術ぶった夢見がちなヒマ人がぼんやりと絵空事を書きつけているようなもんじゃない。むしろ見たくない現実を見て、生き延びるための言葉をどうにかして掴もうとする運動なんだ。

だからこの本の書き手たちは作家の人生を叩きつける。絶対に面白いから読め、って君に言う。今はどんな肩書がついていようと、もともとは、みんなただの本好きだったわけじゃ

ない？ それなら友達同士に戻ってみようよ。

この本の文章を読んでもみると、作家は単なるその国の代表者なんかじゃないってことがよく分かる。小澤英実はジョイス・キャロル・オーツの作品について語る。「性や暴力、普通の生活を営む人間の内面に潜むグロテスクな心理を描き出す手つきに対する嫌悪」を読み手にかき添えてる、と。醜い現実をえぐる作家たちは当然ながら、多数派からは嫌われる。だからラシュデイの言うように、本質的に「作家と政治家は本質的に敵同士」なのだ。

どうして作家たちはきれいごとの向こうを見通せるのか。複数の世界を常に移動しているからだ。貧しい人々の世界と富んだ人々の世界、男と女の世界、異民族同士の世界、標準語と方言を含めた、違う言語の世界。移動すれば、一つの場所で当たり前のことが決して他でもそうではないことがよくわかる。

それは時間についても言えるだろう。ラシュデイの議論を引きながら橋本智弘はこう述べる。「ドイツの作家ギュンター・グラスは、ナチス政権下の世界観の完璧な崩壊を目撃し、創作を通じて自らの手で現実を構築し直した『過去からの移民』である」。ならば、僕たちもまたそうじゃないか。だって、歳をとらない人なんて誰もいないからね。日吉信貴の語るイシグロの主人公のように、転換する時代に苦しみ、見たくないものから目を背けながら、それを無視もできないのが人間じゃないのか。

こうして考えてくると、二一世紀の世界文学のあり方も自ずから見えてきそうだ。英語さえわかれば世界中のことはなんでもわかる、というグローバリゼーションの嘘にみんなが気づき始め、様々な言語の富に魅了されるまま、複数の世界を移動し始める、というのが来るべき二一世紀文学なんじゃないか。英語作家であることを捨て、民族の言葉であるケニアのギクユ語で書きながら、同時に自作を英訳もし、世界を移動して回るグギ・ワ・ジオンゴなんかがいい例だ。

僕らには日本語話者のままで十分に、世界的になれる道筋がある。この本に渦巻く世界文学の魅惑に、今はただ身を委ねてほしい。

都甲幸治



ノーベル文学賞とは

ダイナマイトの発明者であるアルフレッド・ノーベルによってつくられた、いわゆる「ノーベル賞」のうちの一つ。彼の遺言によると「理想的な方向性」の文学作品を生み出したものに与える、とされている。発表は年に一度、通常十月の木曜日に行われ、賞金はその年によって異なるが、一億円を超えることが多い。

主催：スウェーデン・アカデミー

開始年：1901年

受賞者数：110人（うち男性97人、女性13人）

同時受賞回数：4回

受賞時の平均年齢：65歳

受賞者の使用言語ランキング…








- 1位 英語 27人
- 2位 フランス語 13人
- 2位 ドイツ語 13人
- 4位 スペイン語 11人
- 5位 スウェーデン語 7人
- 6位 イタリア語 6人
- 7位 ロシア語 5人
- 8位 ポーランド語 4人
- 9位 ノルウェー語 3人
- 9位 デンマーク語 3人
- 11位 ギリシャ語 2人
- 11位 日本語 2人
- 11位 中国語 2人



参考：The Official Web Site of the Nobel Prize
http://www.nobelprize.org/nobel_prizes/literature/

※すべて2014年8月時点のもの

CONTENTS 目次

I

- 1  村上春樹 —— 記憶をめぐる冒険 14
- 2  アシア・ジェバル —— アルジェリア人がフランス語で語ること 22
- 3  スヴェトラナ・アレクシエヴィチ —— 「ユートピアの声」を集めて 30
- 4  ジョイス・キャロル・オーツ —— アメリカ文学界のダークレディ 38
- 5  ミラン・クンデラ —— 越境と変奏 46
- 6  トマス・ピンチョン —— 超然たるヘビー級文学の雄 54
- 7  ウンベルト・エーコ —— 学者からベストセラー作家へ 62

- 8  ダーチャ・マライーニ —— 日本育ちのフェミニスト 70
- 9  グギ・ワ・ジオンゴ —— ケニアの口承伝統を引き継ぐもの 78

- 10 ナーダシュ・ペーテル 86
- 11 アドニス 86
- 12 ミルチエア・カルタレスク 87
- 13 高銀(コ・ウン) 87
- 14 ヨン・フォッセ 88
- 15 ヌルディン・ファラー 88
- へコラム▽幻の候補者リスト 89


II


- 16  サルマン・ラシュディ —— インドから飛び立つ想像力 92

17  ドン・デリーロ —— マスメディア、テロリズム、小説家 100

18  フィリップ・ロス —— ルーツと欲望 108

19  コーマック・マッカーシー —— 血と暴力に満ちた世界で 116

20  ボブ・ディラン —— 現代詩を歌う「ソング・アンド・ダンス・マン」 124

21  ウィリアム・トレヴァー —— あなたとの距離はどれくらい 132

22 マーガレット・アトウッド 140

23 セース・ノーテボーム 140

24 アモス・オズ 141


25 ハビエル・マリアス 141

26 ペーター・ハントケ 142

27 レス・マレー 142

ヘコラム▽受賞者は一〇〇人一〇〇色 143

Ⅲ

28  アリエル・ドルフマン (ドーフマン) —— チリを語る宿命 146

29  ジョン・アッシュベリー —— 思いがけない世界へ 154

30  カズオ・イシグロ —— 遠い過去を見つめて 162

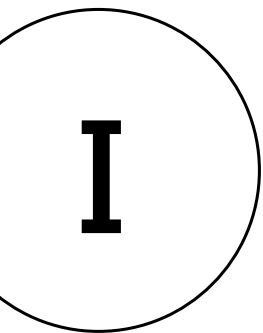
31  ジュノ・ディアス —— カリブ海を渡るエンタープライズ号 170

32  ジョン・バンヴィル —— 未来が過去へ流れ込むところ 178

33  コラム・トビン —— 哀愁がじんわり伝わる 186

34  ウラジーミル・ソローキン —— テキスト、テキスト、テキスト 194

35  パスカル・キニャール —— 「言語の彼岸」をめびて 202



Candidates for Nobel Prize in
Literature
File01-File15



執筆者一覧

242

歴代受賞者一覧

234



イスマイル・カダレ

—— 閉ざされた国からの声

210



ポール・オースター

—— 矢い続けて、最後に残るもの

218



トム・ストツパード

—— 条理の中の不条理

226